

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)			訪問国	オーストラリア
学校名	静岡県立静岡東高等学校	氏名	岩崎優衣		学年 2

多様性を認め合える心を育てる保育を学ぶため、多民族国家であるオーストラリアの保育園で15日間保育園ボランティアを行った。

留学前、日本の保育園でボランティアを行う中で、乳幼児期は子どもの行動や性格を形成していくのに大きな影響があるということを知り、誰もが安心して暮らせる社会を作るには、人格の形成にとって大事な乳幼児期に子供達が自分とは違う見た目や個性を持った人がいるということを知ることが大切だと考えた。また、そのように他者を認められるようになれば見た目や偏見からくるいじめもなくなるだろうという仮説を立てた。

オーストラリアの保育園では、主に三つの探究学習を行った。一つ目は、行われている遊びや活動、保育園の環境を学んだ。部屋には先住民であるアボリジニの民族楽器や絵本が置いてあり、自由に触ったり遊んだりできるようになっていた。また、ままごとコーナーには肌の色が違う人形が置いてあり、遊びから自分とは違う見た目の人がいるということを認識できるようになっていた。環境面では、子どもたちと同じ空間にヤギや鳥やトカゲなど多くの動物を飼っており、自由に触ることができ命の大切さも学ぶことができる。ブランコは危険を防止する囲いがなく、そこには危険を自ら学ばせるという保育士の意図があった。活動の面では、ハーモニーデーというそれぞれの国の文化を学ぶ日があったり、先住民の文化に触れるネイドックウィークあったりとオーストラリアならではのイベントが行われていた。



二つ目は、日本の保育施設との違いを学んだ。まず、保育士自身がいろいろな国籍の人がいること、室内の装飾やおもちゃが多様性を意識したものが置かれていること、そして誕生日やクリスマス祝わない家庭があるなどの日常的な文化の違いがあることがわかった。「それぞれ文化が違うため、家庭の方針を尊重している」という保育士の言葉から、異なる文化を持つ人々と関係を築いていくためには、多様な価値観を理解することが大切であると学んだ。

三つ目は、日本とオーストラリアの保育士の考え方の違いを知るため、それぞれに同じ内容でアンケートを実施した。アンケート結果で特に興味深かったのが「子どもたちに特に身につけ

て欲しいこと（非認知能力）」という項目である。自己肯定感、自立心、主体性、好奇心、想像力、挑戦意欲、協調性、共感性、思いやり、社交性、道徳性のなかで、特に身につけて欲しいと思う上位3つを選んでもらった。オーストラリアの保育士は、1位が主体性、2位が共感性、3位が思いやりという結果になり、日本は自己肯定感、主体性、思いやりという順番になった。オーストラリアは、「The Early Years Learning Framework (EYLF)」という保育方針のもと、主体性や自分で考えて行動できる力を育てることを重視していた。一方、日本でも主体性を育むことを大切にしているが、日本人は自己肯定感が低い人が多いため、まずは主体性を育む土台となる自己肯定感を育てることを重視しているということがわかった。また、「多文化教育の必要性を感じるか」という質問では、オーストラリアの保育士は全員が「感じる」と回答し、日本の保育士は9割が「感じる」と回答した。しかし、「子供達が他文化に触れられるような環境を取り入れているか」という質問では、「取り入れている」と回答したオーストラリアの保育士が9割に対し、日本の保育士は1割ほどが「取り入れている」と回答した。



これらの結果を踏まえ、日本の保育士に留学での探究学習の成果を報告したところ、「主体性の支援を行う中で多文化を知ることができるような遊びを取り入れていきたい」との意見もあったため、近い将来、子どもたちが世界の人々を自然と受け入れられるような異文化を感じる乳幼児施設に変わっていくことが期待できる。このような変化は国際的な背景を持つ子どもが増えている静岡でもとても重要になるだろう。

留学でのこれらの探究学習をとおして、多様性を認め合える心は、ただ多国籍の環境にいただけでは育たず、保育士が多様性を意識した遊びや活動を意図的に作っていることで子どもたちは自然と理解し、共感力や協調性を育てているのだということがわかった。

多様性を認め合える心を育てる取組は、容姿や障害に対して偏見を持たない心をつくり、誰もが安心して幸せに暮らすことができるウェルビーイングな社会につながっていくだろう。このような社会を創造することができるよう、学び続けていきたい。将来は、大学に進学し、この経験をスタート地点とし、更なる探究学習を続け、多様性を認め合える社会づくりに貢献していきたい。

